# うろこアンソロジー　二〇〇八年版

# うろこアンソロジー 二〇〇八年版 目次

LALA MEANS I LOVE YOU° 田中宏輔 3
母の肖像 有働薫 6
かぢをたえ 倉田良成 8
草男(くさおとこ)—出現 足立和夫 11
からだはからだ 高田昭子 16
犯罪許可証 南原充士 20
南、十字へ。 海埜今日子 25
私の声、静かに —第一部、短詩篇— —第二部、長詩篇—／いわば世界は（全、3篇。）冨澤守治 28
星落 三井喬子 38
連詩・ヤコブの梯子 水島英己 岩田英哉 高田昭子 41
君が酔う 若井信栄 48
西日の入る部屋 一瀉千里 49
雪 おかだすみれこ 52

# LALA MEANS I LOVE YOU°

田中宏輔

●マドル●マドラー●マドラスト●子供たちは●頭をマドラーのようにぐるぐる回している●マドラーは●肩の上でぐるぐる回っている●ぐちゃぐちゃと●血と肉と骨をこねくりまわしている●そうして●子供たちは●真っ赤な金魚たちを●首と肩の隙間から●びちゃびちゃと床の上に落としている●子供たちの足がぐちゃぐちゃと踏みつぶした●子供たちの真っ赤な金魚たちの肉片を●病室の窓の外から●ぼくの目が見つめている●学生時代に●三条河原町に●「ビッグ・ボーイ」という名前のジャズ喫茶があった●ぼくは毎日のように通っていた●だいたい●いつも●ホットコーヒーを飲んでいた●そのホットコーヒーの入っていたコーヒーカップは●普通の喫茶店で出すホットコーヒーの量の3倍くらいの量のホットコーヒーが入るものだったから●とても大きくて重たかった●その白くて重たい大きなコーヒーカップでホットコーヒーを飲みながら●いつものように●友だちの退屈な話を聞いていた●突然●ぼくの身体が立ち上がり●ぼくの手と

いっしょに●その白くて重たい大きなコーヒーカップが●友だちの頭の上に振り下ろされた●友だちの頭が割れて●血まみれのぼくは病院に連れて行かれた●べつにだれでもよかったのだけれど●って言うと●看護婦に頬をぶたれた●窓の外からぼくの目は●首から上のないぼくの身体が病室のベッドの上で本を読んでいるのを見つめていた●ぼくは●本の間に身を潜ませていた神の姿をさがしていた●いったい●自我はどこにあるのだろうか●ページをめくる指の先に自我があると考える●いや●違う●違うな●右の手の人差し指の先にあるに違いない●単に●普段の●普通の●あるがままの●右の手の人差し指の先にあると考える●ママは●人のことを指で差してはだめよ●って言っていた●と●右の手の人差し指の先が記憶をたぐる●でもさあ●人のことを差すから人差し指って言うんじゃんかよ●って●右の手の人差し指の先は考える●自我は互いに直交する4本の直線でできている●1本の直線からでもなく●互いに直交する2本の直線からでもなく●1点において互いに直交する3本の直線からでもなく●1点において互いに直交する4本の直線からできている●と●右の手の人差し指の先が考える●ぼくの目は●窓の外から●それを見ようとして●ぐるぐる回る●病室のなかで●4本の直線がぐるぐる回る●右の手の人差し指以外のぼくの指がばらばらにちぎれる●子供たちの首と肩の隙間から●真っ赤な金魚たちがびちゃびちゃあふれ出る●子供たちは●頭をマドラー

のようにぐるぐる回している●マドラーは●肩の上でぐるぐる回っている●ぐちゃぐちゃと●血と肉と骨をこねくりまわしている●そうして●子供たちは●真っ赤な金魚たちを●首と肩の隙間から●びちゃびちゃと床の上に落としている●それでよい●と●右の手の人差し指の先は考えている●45ページと46ページの間に身を潜ませていた神もまた●それでよい●と●考えている●ああ●どうか●世界中の不幸という不幸が●ぼくの右の手の人差し指の先に集まりますように！

# 母の肖像

有働薫

ジャンヌ・ダルクの裁判記録日本語訳を詳しく読んでいくと、興味深い記述に出会う。ジャンヌが十七歳で王太子に面会するためこれを限りと家を出たとき、母親のイザベルは仲間の巡礼者たちと巡礼に出ていたという。これは妙な話しだ。父親のほうはジャンヌを戦場に行かせるぐらいなら家の前を流れるムーズ川に投げ込んで溺死させてしまうよう兄たちに命じていたという。兄たちは父親の言いつけを守らず、やがて妹を追って王太子軍に加わりに故郷を出てくるのだ。ジャンヌの戦績により一家は伯爵号を授けられ、妹が刑死した後も、生き残ったほうの兄ピエールは、オルレアンに領地をもらって住み着いているのだから、一家の出世物語と言えなくもない。これらの資料から推定されるのは、ジャンヌが強く、母親の精神的影響下にあった、ということだ。一四三一年二月二十一日の最初の審問記録にも、「姓については全く知っていないと述べた。」と記されている。この答え方の不備については、後の三月二十四日の記録には、「自分の姓

はダルクもしくはロメであり、自分の故郷では娘達は母方の姓を用いていた、と述べた。」との記述で補われている。ダルクと、父の姓でジャンヌが呼ばれるようになったのは、後のことだという。それにしても巡礼旅行中とは。母のロメという姓も、ローマに巡礼した者、という意味で、母自身が娘時代にローマ巡礼を果たしたのか、そういう家族がいる家の者という意味か、ともかくローマ巡礼という大事業に関連してある種の尊敬をうけていたらしく、ただのありきたりの農婦ではない。信念のおそろしく堅固なそんな母親の許で育てば、当然信仰心の固い、思い込みの激しい娘に染まることに間違いない。同じ二月二十一日の記録には「自分の信仰を授けてくれたものは母以外誰もいなかった、と述べた。」とある。この母にして、この娘。幼い娘が驚異的行動力で、母の想いを実行に移した。ジャンヌの精神には何の疑いもない、真直ぐな燃え立つ信仰心のみがあったのだろう。母がそれを保証するのだから。一心同体の母娘。もちろん時代がまるで違うが、わたしにはこの母こそ少々くせものに思える。

# かぢをたえ

倉田良成

題不知

由良のとを渡る舟人かぢをたえ行衛もしらぬ恋のみちかな　　曾彌好忠

その日曜日も晴れていた。かつて大きな遊園地があった駅周辺は、なくなった今でもなにか大きな花の痕跡のような名残のにぎわいがあって、もうない遊園地のスピリットでもって街が出来上がっているかのようだ。改札口を出たところで待っていると、詩人というよりは論客と形容したほうが正確じゃないかと思われる詩人Aが、ようと言って片手を上げながら近づいてきた。ふたりでたばこを吸いながらもうひとりを待っていると、改札ではない、大通りのほうから自転車をころがしながらやって来たのは、銀縁のメガネをかけてときどき安定剤のお世話にもなっているらしい詩人B。彼は批評のほうで世間的な評価を受けているが、じつはわれわれ三人のなかでいちばん詩人らしく、つ

まり病気っぽい。Bもたばこの箱を取り出して一本くわえる。三人の男が煙突状になって突っ立ったままけむりを上げてから、てんでに足許にすいがらを落として靴でもみ消し、通りの向かいにあるデパートの地下に入ってきょうの宴会のための酒と肴を調達する。駅裏の赤煉瓦の堤防を越えると河原が見えてくる。われわれは、より人のいないところ、草の繁っているアジールをもとめて川の流れの飛び石を伝い、川の中洲にうたげの座をひろげる。論客のAは大酒飲みだが、詩人らしいBは自称そんなに飲めない。私はといえば、酒の相手ならどんなやつとでも何時間でも付き合ってみせるという妙な特技がある。Aがいつも言うところでは、こないだ亡くなった菅谷規矩雄は酒の飲みすぎが身体にきたのだが、じぶんは身体が強いので酒の影響があたまにきているのだ。そう言ってデパートで仕入れてきた純米大吟醸酒の一升瓶をかたむけて紙コップに酒をつぎ、若狭の小鯛の笹漬けをひときれ口に入れた。両方とも、そのころほんの少しだけ羽振りがよかった私が供出したものだ。詩人っぽいBは紙コップ一杯も空けないうちからああ酔っぱらったを繰り返す。ひばり揚がれる晴天の午後はそうながくは続かず、ゆうぐれどきが近づいてくる。AもBも私もかなりいい気持ちになってきたのは昼酒が効いたのだ。対岸の繁みには二組三組、恋人たちがささやきあっているのがわかる。詩人っぽいBは、ああ酔っぱらったとまた小声で呟いてから、口に手を添え、対岸に向かって

大声で、そっちに石を投げてもいいかあと叫ぶ。二、三か所から力のない声で、だめだぞうと返ってくる。論客のAはそこいらにある枯れ木だの枯れ草の束などを集めてきて、案の定、焚火をはじめる。通報されたり実際に警官が来ないかとはらはらするが、彼はむしろそれを待ちのぞむような感じで盛大に炎を上げる。今でもそのときの写真があるが、西の空に恐ろしく冷たい金色が輝いているのを、あのころは気づかなかった。その後、あのときのうちの一人は離婚して沖縄に行き、一人には初孫ができ、もう一人は癌になった。そっちに石を投げてもいいかあ、だめだぞう、という、誰のものでもない言い交わしは、夕映えに鳴りひびくセイレーンの誘きのように、われわれを深い迷宮へみちびくものだったのだ。あの恋人たちも、もうこの世界のどこにもいないのだが。

# 草男（くさおとこ）—出現

足立和夫

机の電話が呻きはじめ身が強張る
受話器をとると
声を吸い込んだままになってしまい
キョックキョックキョックキョックキョック
　キョックキョックキョックキョックキョック
酷くどもる　吃音
極東倉庫です　がすぐにはでない
わたしのなかの草男がすべてのそとを
拒絶しようと明滅するのだ
しかたがないので
鼻をつまんで気絶してもらう

会社のひとたちは軽くわらう
わらって緊張をほぐそうとするのだが
歪んで硬くなった頬のなかで
喉のおくから無口がせりあがってくる
机のうえに視線がさまよい
わらいを放散できない
話しかけてくるのだが
耳のなかで沈黙が膨らみつづけていた
椅子からずり落ちた草男は
なにかを低く喚き
ここからの脱走をかんがえるが
すべての精気が硬直し痩せたままだ
穏やかに息をひそめ
五年間居て辞めた
草男の汁の飛沫と湿った匂いが
さらに濃くなって

空にのぼり蟠(わだかま)っていく
緑色の闇　耳鳴りの深い空
時間が中途半端にちぎれたままだった
幻影かもしれないが
尖った誤解はつねに悩ましい
まるで吃音のように
こころは怪物なのでたえず発情して
生きがたく逝きがたい
ほとんどの時間を眠り込んでいる草男は
草の声でいった
空にのぼる蟠りは
放っておけば夜陰の河に流れてそれですむ、と
沈黙のための用意もしてみたが
孤独の底に落ち着くには
生涯の終息はいつも近すぎる
草の声はいった

草の葉のしたで生き抜いてしまえ
うまく隠れた者はよく生きるから、と
現れることだけがすべてではない
草の茎を折って汁を啜れば苦い
ひとの生は宇宙のなかで
燃える星に困惑し
謎のにおいを嗅いだままだから
そのまま終わるだけ
うつくしく光る朽ちた骨たちも
謎というわけだ
崖っぷちの静けさを知る者は
あまりいないが
草の葉は
晴天も　曇天も　荒天も
地上で穏やかにあたらしい空を
受けとめて生い茂る

緑色の闇　耳鳴りの深い空
草の声を耳に詰めて
夕色の世界を往く
断崖の草が生い茂るところで
いつものように草男は眠りこけている
風が崖を這うように昇ってきた

「ル・ピュール」7号（2008.9.28発行）に掲載したものを一部改稿しました。

# からだはからだ

高田昭子

温い息が吹きこまれる
耳の内側の産毛がいっせいに戦いで
思いがけないほどおおきな風の音になる
耳は
柔らかな骨とパン生地のようなものだから
食べ物に似ている

手

夏でも冬でも
心まで冷やす右手あたためて

肩

ちょうどおとこの脇の下あたり

頭

おとこの左腕に載せる
玉石脳髄
心と繋がっていないもの

目

目蓋がおもい

口

つぶやき

頬

花の色になれ　花の色になれ

産道

処女地への暗い道
あなたがこの世へ来た道

足

素足からませて

背中

見たことのない自分がきしんでいる

# 犯罪許可証

南原充士

ふと拾った犯罪許可証――――免罪符
　盗もうと殺そうと犯そうと　咎められない権利を保障されて
　　男は　おそるおそる鏡を覗き込む
　　（この顔でどれだけ残忍なことができるだろう）

やがて思いつめたようすで　男は
　外に飛び出し　町の中で見つけたピチピチギャルに
　　敢然と襲いかかり　有無を言わさず
　　思いを遂げ

あまりのあっけなさに　夢ではないかといぶかった

おまけに娘は無表情に応じ　すぐに消え去ってしまった
（しかし　あんな感覚は空想では得られっこない）

男は　二人　三人と　愛くるしいギャルを物にし
やがて　けだるさを引きずりながら
町一番の高級レストランに立ち寄った
男はテーブルにゆったりと腰をおろし
次から次に料理を注文し
ワインも飲み放題
めまいとも酔いともつかぬ心地で立ち上がったはずみに
隣のテーブルにぶつかってしまった
お客は　一瞬　三角の目で男の方を見た
男は激昂し　テーブルをひっくり返し
お客の若いカップルを足蹴にし
もちろん店中のインテリアは手当たり次第に破壊し
勘定は払わずに店を出て

いったん引き返して　レジから紙幣を
わしづかみにして　上着のポケットに詰め込んだ

時は秋　涼しげな風の吹きぬける夕暮れの町を
男は　歩きながら
（もっと残酷に！　もっと容赦なく！）の声にそそのかされ
銃砲店に押し入ると
ライフル一丁と弾丸を奪い
町を行く人びとの群れに向かって　腕が疲れきるまで撃ちまくった
悲鳴をあげて逃げ惑う人びとの中に
たしかに血しぶきをあげて倒れる者があり
数十人の死傷者たちが　通りに無秩序に横たわった

男は車を強奪し
時速２００キロのスピードで走った
危うく　他の車に衝突しそうになったり

道路から転落しそうになったりしたが
　いつのまにか通行量の少ない郊外に出てしまった

見れば　飛行機が間近に飛び立っている
　男は　一路　空港へまっしぐら
　　ジャンボ機を乗っ取ると
パイロットに命じた
　「アメリカに行け、ニューヨークだ」

アメリカに着くと　男は
　ペンタゴンへ駆けつけた
　　やがて
どこからともなく多核弾頭ミサイルが一基
　また一基と
　　敵国へ向けて発射された

あっけなく核兵器が使われ
誤解は解くいとまもなく　世界は
核戦争に突入した

男は　廃墟と化していく地上を見やりながら
“犯罪許可証”を投げ捨てた

それは　スペースシャトルを尻目に
ひらひら　ひらひらと
どこへともなく落ちていった

# 南、十字へ。

海埜今日子

ぬるいちてん、ふみいれたなら、ほぐれてゆく、というかんぜんちょうあくは、もはやつうかしがたいものだった。まだらになったこかげです、かんどうとらくたんのふきだまるよつつじです、ありがとう。ほしのしせんがくうきをふるわせ、それぞれのものがたりをこぼしている、ひるのふるまいがよどおしゆるむことのないように、さんばんめにこえをかけたら、きっとわたしをふみだすことになる、そうしるされていたものもあるのだろう。はもんのようなこもれびはかわきつつ、みなみをみつめることもできるのだ。あくにんすぎるおこないがひたしているのだと、たすけをもとめるけはいがあったとして、きづくだろうか、さけびにならず、くちのはしからあつくなる。じゅうじろでは、みみをよそおったかたりてがとどこおり、しったふりのえだをたおり、ささくれだったきぶんをかきまぜ、よんばんめのつうかをあてたがる、ありがとう、しずくがほしであったのなら、ずいぶんとききてもかんけいするのですが。あまりにも、とたちすくん

で、きづきたかった、かたられたばしょがよるにしずみ、あかるくなって、ひまつよりも、けっしょうよりもきずにささった。もえるようなほうがく、しほうにたわんだきんこう、ここではどんなけはいもびょうしゃにちかいし、ちがうのだ、ざんしにふるえるくうきはつじのよどみにもかたんする、なぜならこかげはせきたんのように、くらさゆえにうきあがっていたのだから。ぬるんだきろくがたばねられ、ほしのむこうで、わたしたちをこえにだす、ききとどけなければ、とどめなければ、ありがとう。こらしめられるべきあくにんが、たんじゅんさをもとめてゆきかい、おわったつじがひといきつき、かわいたすいめんをほっしていた、それはこうさするまだらなながれのせつなだったかもしれない。よんばんめにひそんでいたくうきのなかで、かんぜんなぜんにん、というとうじょうにふはいをからめ、かいわのかけら、そだてればよかったのだ。ひらいたみみと、つぐんだひかりで、こもれびをたぐり、みなみにたむける、こわれたつかいかた、ふるいしぐさのつちけむりとなって、しせんのかさなることもあるときく、ほし、ありがとう。すこしのぜんにんが、ばちがいなまでにほういをこぼす、それはまがりかどでのはじめてのかいわだった。ぬるいものがしゅくふくした、ぜつぼうした、こんなふうに、またたくむごんがあってもいいとかきとめる。かわいたしずくのあたたかさよ、つめたさをまきちらすようにして、おおむねのじゅうじろでえだがうなった。

（初出：支倉隆子個人誌『南へ。』1号）

# 私の声、静かに ―第一部、短詩篇― ／ ―第二部、長詩篇―いわば世界は（全、3篇。）

冨澤守治

## 私の声、静かに ―第一部、短詩篇―

なぜか
通り過ぎて行く影たち
このこころのなかに差し、忘れ放ち、終わり行く
通り過ぎて行く
意識の光たち、その
わずかに明るきもの、ほのかな

ひらめきと言われる思い付きに似て
傾いて行くひとびとは

思い出となり
長く繰り返して見てきた夢と重なり
現実と仮想の空間を
遠く離れている者の思い
私

私は　あなたたちは誰れなのか、なぜなのかと問いかけるが
応えもなく

私の言葉は、私以外の友に、恋人に
心の内にも、繰り返されることもない

行き、そして去る者

帰り行くひとに
ただ呼びかける
私の声

静かに

## 私の声、静かに　―第二部、長詩篇―

なにのわけもない、疑わしげに傾いたこの世界
失い続けている私の魂の領地は冷え続けていく

逃れたくても、とどまり
居切り立つ想いを振り捨てても

大切な人々が流れて行く

もう二度と取り戻せない時間のなかで
―そういえばこれもいつかは時代となって、すべての物事は等閑に伏せられていくのだろう。
もちろんそれを期待しているやからどもも、当然に居るのだ。―

もう二度と取り戻せない時間のなかで
夢の話で恋人は語りだし、眠りのなかで私は
それを聞いている ―なんという、はかない幸福か！―
二度と取り戻せない時間のなかで

こんなことはあっていいのだろうか
愉快でも不愉快でもあるテレビのニュースに、私は思いを馳せている

いつもそんな夕暮れには

突然に世界が色を褪せて行き
堕落した戒律のひどさに誰もが驚いている
いや違う。むしろそれよりは
誰かが話したことは、それほども話題になるものなのか
それよりは…
誰かの悲しみに共に悲しんでいるほうが
まだしも幸せであるのではないのだろうか

埋めようもない絶望と損失
とどまることのない渇望もまたともなう
悲劇はいつまでも希望には結びつかない

どうか私を誰もがほおって置いてくれ
そのほうがよいのか、私は疲れているんだ
思いを馳せる恋人は、いつまでも私の言うことを聞かない
私の恋はどうしていつまでも古風なのだろう

考え抜いても、考え抜いても
私の心は深く、思いは深く
齟齬はない。それなのに
あまりに多くの風が私たちを通り過ぎて行ったのだろうか

静かに、静かに
この世界に問いかけてみる
小さきものか？
この私は

**いわば「世界」は**

いわば人間（ヒト＝一応、ホモ族に限る）の「世界」は閉じられたマッチボックスのようなもので、小さくて縦長の狭い窓だけが開いている。あるいはそれしか出入り口の無い場合も多い

つまり「ヒト」の「世界」は、多かれ少なかれ閉じられているのだ

非常に悲しいことではあるが、現下のひどい状態では仕方がないことかも知れない。こういうと、そのー、私はとても嫌なのではあるが、

「この世界しか、あたしは知らない」
「おれの世界やで、お前、ナニ言うトンね」
「それが何か、問題やと、（お前）思てるのか？」
「お前、一体ナニが不満だ！」

ヒトよ、お前の知るものは部分であって、世界「そのもの」ではな

い。世界の似姿を、神の似姿のように映しながら、この世を彷徨っているだけなのだ。世界ではない。まして人類の運命でもない

結果的に誰かが苦しみ、死ぬぞ

と言ってみても、私の心は言葉ほどには誰にも届くまい

この世界を、この場合は惑星、地球と言ってもよいのだが、
この世界をめぐり、吹き渡る風は－これもヒトには姿の見えない魔物だ－「世界」を押し流して往く

別の、誰かの「世界」があって、その常識に従って、世界を変革する机上の空論が出来た。あるいはそれらはおうおうにして悪意に基づくもので、そのひとたちはともかくも注目された。さらに為政者の喜びを満たすものでなくてはならなかった
それは、無邪気ではないか？

再び、あなたの縦長の窓に帰れば、光も縦長に狭く差す
行き会うひとびとにも、あなたは縦長の通路しか許さない

広い「世界」は、いつも危険な「暗闇」として出会われる
あなたは豊穣に実る麦畑の、干されて刈り取りを待つ水田の稲の実
る、そんな光景の陽の光も、（その意味も）知らない

光合成の経路を成すクロロフィルは、あなたの血を流れるヘモグロ
ビンと逆に働いている
かくて二酸化炭素は、より高次の糖類に固定されては、酸素に燃え
てエネルギーを発生し、二酸化炭素に戻る

忘れるな、この物質の、遺伝子たちの成し遂げる合理的な円輪を！
合「理性」の本質は、こんなところにもある
光の「本質」を見よ、神眼をもって見よ

それでもあなたの窓からは細く縦長の光だけが斜めに差している
めぐり往く日時計の中に住むあなたは、さらに秒針付きの時計を
見つめている

こんな例だけではない
ことごとく、本来の世界の文脈は数字に置き換えられていく
デジタルな夢が現れては消え
獰猛な自己犠牲と殺戮と排他も、数字の判断に置き換えられては
繰り返すマネーゲームのうちにこの世は、破たんしていく

ひとが縦長の狭い窓だけが開いた部屋に住む限りは

# 星落

三井喬子

あなたが逝った秋の夜に
はり裂けてしまった水面から
飛びだして行った鳥がいたよ
暗い空を蒼白く舞って遠ざかり
その飛沫を煌めかせ。
読経も静まった斎場の
灯り
一つ消え　また消えて行き

うっすら暗い

この山陰に遺体が一つ。
誰からも愛されたが
誰も愛さなかったあなたのことは
沢山の胸に残ったが
あなたはそれらを全部捨てて
きっとせいせいしたことだろう。
その額に
形なく
かぎりなく落下した　星。
あなたは自らの生を孤独なものと為し
わたしの生をもまた寂しくした。

捨てる。
これほどあなたに似合う言葉はなくて
秋の夜空はひんやりとし

絶え間なく　ひりひりと揺れている。
魂は
宙に　びっしり詰まっているのだろうか。
翌日は灰になるあなたの骸は
なるほど　残骸と呼ぶにふさわしかった。
深夜の斎場の
灯り　また消え
夜の蒼い鳥が
あっ、と小さな声をあげる。

（『部分』36号）

# 連詩・ヤコブの梯子

水島英己　岩田英哉　高田昭子

1

エルンストの「夏の名残の薔薇」をMidoriが弾いている、
難しさがなつかしさに一瞬にして変わる。薔薇はバラの匂いに
開いて、漂って、夏の名残を冬が思い出している。
想っているだけでは匂わない、そうだよ、
弾かなければ、歩かなければ、あの夏の岬を、
その先の海の匂いまで、すべての思い出が消え去る沖の波まで。

（英己）

2

薔薇の香りが潮の香りに変わる
その時間の境目はみえないが
そこからはじまるものが聴こえる
波の音楽　船底で櫓を漕ぎ続ける幻の奴隷たち
空の音楽　ヤコブの梯子を降りる光の子供たちの歌声
わずかに湾曲する水平線を越えても越えても音の記憶はついてくる

（昭子）

3

時間の潮目、空間の肌理を読みながら、
世界を変奏する誰かの歌声を
ガレー船の舳先で聞く。市場で売られる黒、
罪深い白。権力への夢は見果てぬ夢だよ、ヤコブ。
小さいものになって、どこか遠いところへ、行きたいよ、
思い出が生まれるよりも速く、記憶の波濤を越えて、

（英哉）

4

小さいもの、両脚をかかえて泣いていたね、銀杏ふる初冬に
私たちの別れは、私が操作したのか、（小さいもの、ごめんね）
朝の川はたおやかにうち煙り、
小夜ふけて鴉は鳴き、
むかしむかし、しづかなおほをとこがゐました、
静かに言いました、「さあ、さあ、恐れないで、……」

（英己）

5

おほをとこのながいながい旅
ちいさいもののちいさなちいさな旅
ながい旅のエピローグは
ちいさな旅のプロローグに重なりあって
物語は続いてゆくのだろうか

「さあ、扉を開けよう。」

（昭子）

6

という、不思議な声に促されて
わたしは、思い切って扉を開けて外に出る。
なんという世界だ、ここは。死者たちが
泣いている。サンティアゴ・デ・コンポステラ。
ぼくは巡礼者となって、この木に刻まれた
ヤコブの十字架を信ずる。ドイツの青い森から。

（英哉）

7

コルマールに詣でて、グリューネヴァルトの祭壇画、
苦悶に満ちた磔刑のキリスト像の前に、
これ以上一体誰が、これ以上の惨苦にさらされ得るだろうか？

巡礼者たち、麦角に侵された壊疽の巡礼者たちは、
額づき、深くキリストの痛みに癒される、これは
痛みの転移ではない、注視することは薬以外のものではなかった。

（英己）

8

処女受胎告知　深い戸惑いのなかで
朝ごとに母は祈ります
歓び多き日々を子と皆に、痛みは母に与えよと。
国境線を幾度も描き変えたのは誰？
永い旅は終わることはない
だから道を閉ざさないで。

（昭子）

9

銀杏並木は、金色の外洋船、を見るわたしは、

いつもそこにはいない。
だれかが歌う、Your absence has gone through me という
気だるいジャズ・ピアノを聴きながら、
このまま溶けてしまいたい。なにもかも、
全部、放り投げて。

（英哉）

10

もの言わぬ、もの言えぬだれかが
金色の葉たちの風の旅を見ている。
さざめく舗道の隅で泣いている小さな子の上に
一枚のきみが落ちる。
冬の静かな挨拶、
その気配が私の体のなかを通り過ぎて行った。

（英己）

11

月から落ちたうさぎのかすかな悲鳴を聴いた
ニンゲン語を話したいうさぎ
寒夜の書斎のキーボードを飛んで跳ねて
言葉の迷路　愛の胸突き坂　涙の水たまりに落ちて
泣きはらした赤い目
長い耳は木枯らしの音に震えて

（昭子）

12

浮く日、沈む日、照る日、曇る日、
泣いても、だれも、助けてはくれないよ、
うさぎよ、うさぎ、うさぎさん、ことばは、
魂のようだね。お前も必要としているのだね。
姿を隠して、宙に浮く、ぼくは今日も、
ふわふわだ。もっと、ふわふわしてごらん。

（英哉）

# 君が酔う

若井信栄

君が酔うわ～（だらしなく）血よ　尿
や　血　尿（驚愕の体で）
さあ　誰？（茫然自失の体で）
ウィ～（手で口をおさえて）死のう（破れかぶれに）
いいわ（もうどうでもいいという感じで）嘔吐
泣～いて
後悔の～　無数～ま～～で～～～

日本短詩人協会　http://8603.teacup.com/tamemalu/bbs

２００８年10月7日

# 西日の入る部屋

一瀉千里

西日が入る　狭い部屋には
本が　山積みだった
歩くと　足元の本の角が当たって
バラリと崩れた

崩れた　その本の中の
散乱し　はみ出た一冊
表紙には　炎の海で泣き叫ぶ子供
真夏の　酷暑の朝が
始まろうとしていた

誰も　何も予想しない
お城の　石垣で丸い陰を残して
一瞬に　消えたひと

生きるとか　死ぬとか
選択する余地もなく
こぞって　死の底へと引きずりこまれた
一九四五年の　八月六日
六十三年前の　あの朝

戦争の痛みを
あの日の痛みを
刻印するために　世界中から
必然のように　集まる人々

しかたがなかった

なんて　街ひとつを燃やしておいて
消えた命に　謝罪をすることもなく
まなこを　しっかりと開けて
現状を　確認するがいい

西日の入る狭い部屋から
あの日の朝へと　白い道が現れて
スルスルと　繋がってゆく

# 雪

おかだすみれこ

堕ちていく速さは
迷いのままに計れないから

どれくらいの傷みを覚悟すればいいのだろう

倫理なき荒野は果てしなく広がっていても
どこかに
白く冷たく静かに降り積もる場所があるのなら

無能の微笑を浮かべて
やさしく受けいれてあげてもいい

けれどそこに真実はないし
幼かった頃のような悦びもすでにないから
代償を求めて手を差し出すじぶんを
想像してみる

言い訳もなく誰かのせいでもなく
潔く汚れていく薄い雪のように